教育開発推進機構 NEWSLETTER

教育開発ニュース！

VOL. 2
NEWSLETTER

KOKUGAKUIN University 平成22年（2010）6月00日

目 次

●平成21年度 SA（スチューデント・アシスタント）
第Ⅰ期担当者ヒアリング会 …… 2p

●経済学部のFD活動
学部共通必修科目「日本の経済」での取り組みを中心に
経済学部教授 橋元 秀一 …… 11p
経済学部におけるFD活動の現状と課題：「基礎演習」を通じた取り組み
経済学部教授 田原 裕子 …… 14p
学部長からのコメント 経済学部教授 中泉 真樹 …… 19p

●シリーズ「大学授業最前線―教員の努力！学生のまなざし！―」
教員の授業努力 針谷 壮一（文学部准教授、「外国語学1（中）」担当）…… 20p
受講学生からのコメント …… 21p

●教育開発推進機構彙報（平成21年11月1日～平成22年5月31日）…… 23p

●教育開発推進機構教職員紹介 …… 24p

●啐啄同時（そったくどうじ）―編集後記― …… 24p

國學院大學教育開発推進機構

SA（スチューデント・アシスタント）第Ⅰ期担当者ヒアリング会

本学は平成22年度後期よりSA（スチューデント・アシスタント）制度を導入します。それに先立ち、平成21年度後期に第Ⅰ期トライアル運用を行い、無事終了することができました。そこで、トライアルにSAとして参加して下さった4名の学生の方々に、それぞれの業務の概要を紹介していただくとともに、実際にその業務を遂行するなかで感じたこと、気付いたこと、改善してほしい点、またトライアルに参加した先生方からの反応などについて語り合っていただきました。和気藹々とした雰囲気のなかで、機構の先生方からの質問や意見も飛び交う、活発な座談会となりました。

対談日時

平成22年2月5日㈮　11：00〜12：40

会　　場

國學院大學渋谷校舎　３号館３階　教育開発推進機構

対談参加者：（五十音順、敬称略、所属等は開催当時）

杉山美幸（文学部日本文学科2年）
箱崎かを（文学部外国語文化学科4年）
比企野義孝（法学部3年）
武井大樹（神道文化学部3年）
赤井益久（教育開発推進機構長）
柴崎和夫（学修支援センター長）
新井大祐（教育開発推進機構助教）
中山　郁（教育開発推進機構助教）
仙北谷穂高（教務課長）
司会：**鈴木崇義**（教育開発推進機構助教）

はじめに

鈴木　お集まりいただきありがとうございます。本学におけるSAのトライアル（第Ⅰ期）が終了しましたので、今日はそのヒアリングを行いたいと思います。SAの皆さんからの意見が次年度のトライアルに活かされるという意味でも、貴重な機会になると思います。率直な意見をよろしくお願い致します。また、先生方からも、せっかくの機会ですので、SAの皆さんに色々と質問をしていただければと思います。最初に赤井機構長からご挨拶をお願い致します。

赤井　皆さん、半年間ごくろうさまでした。ありがとうございました。國學院大學においては、SAはまだ正式な制度として定着しておりません。ですから皆さんにお手伝いいただいて、大きなクラスを中心に、トライアルというかたちで、平成21年度の後期から平成22年度前期にかけて実施する運びとなりました。平成22年度の後期から本格的に導入する計画です。本学においては初めての経験でしたので、皆さんは恐らく試行錯誤の連続で、ご苦労も多かったことと思います。改めてお礼申し上げます。今回のヒアリングで、新たな制度として立ち上げる場合にどこを改善し、強化すればいいのかについて、我々も制度を考えてゆく上での参考にしたいと思いますので、感じたこと、思ったこと、先生との関係、授業中の居場所等々、率直なご意見をお聞かせ願えればと思います。よろしくお願い致します。

鈴木　SAの皆さんも自己紹介をお願い致します。

杉山　文学部日本文学科２年の杉山美幸です。土曜２限の笹生衛先生の神道を担当しました。

箱崎　文学部外国語文化学科４年の箱崎かをと申します。担当は月曜４限の田原祐子先生、水曜１限の石井研士先生、木曜３限の小越洋之助先生、そして金曜２限の大坂健先生の授業と、４限の高橋克秀先生の授業の５つを担当しておりました。

比企野　法学部３年の比企野義孝と申します。箱崎さんと一緒に、月曜４限の田原先生と、金曜４限の高橋先生の授業を担当しました。

武井　神道文化学部３年の武井大樹です。木曜４限の高木康順先生の授業を担当していました。

ＳＡの業務内容

鈴木　５コマも担当して下さった方もいれば、１コマだけの人もいますし、箱崎さんと比企野君はペアで担当するなど、SA各員の担当の形態には一律ではなかった部分もありました。そこで、まず、それぞれSAを実際にやってみてどうだったか。どのような仕事をしたかということについてお話いただければと思います。

杉山　私は先生の来られる前に黒板を綺麗にしたり、AV機器の設定で先生おひとりでは大変なところをお手伝いしたりしました。パソコンを立ち上げたり、教室のモニターの位置を下げたり、細かいことをしただけなのですけれども。それから配布物については、担当した笹生先生はお使いにならない方だったので、印刷は今回担当しませんでした。

杉 山 美 幸
（文学部日本文学科２年）

仙北谷　笹生先生はAV機器を結構使われるのですか？

杉山　そうですね、パワーポイントをお使いになります。

赤井　AV機器で不具合があったというようなことはありましたか。

杉山　はい。先生は表示する資料に文章をたくさん書かれるのですが、それがかすれて見えなくなってしまったり、モニターに写らなかったりということがありましたので、そのときは教室変更になりました。

鈴木　そのときに、SAとしてお手伝いしたことはありましたか。それとも「変更するよ」と、それだけでしたか？

杉山　それだけでした。

柴崎　最初に黒板を消すというのは、先生に指示されて、ということですか？

杉山　いえ、汚かったので自分で消そうと思って。

赤井　教員にとって黒板が綺麗だというのは、ピッチャーにとってマウンドが綺麗であるのと同じように、非常にやる気が出るのですね。汚いと、それを自分で消さなければいけないでしょう。非常に戦意が削がれるのです。ですから大変ありがたいと思います。

柴崎　授業が始まってからはどうしていましたか？

杉山　始まってからは、本当に先生の授業を聴いているという感じでした。ただ、AV機器の調子が悪くなったときには行かなければならないので、先生の指示が聞こえるように前のほうに座っておりました。

柴崎　教室はどこを？

杉山　２号館の２階の2203教室でした。広い教室です。

鈴木　武井君は１コマだけ、高木先生の授業だったということですね。どうでしたか？

武井　同じようにAV機器の準備ですとか、授業が始まる前に黒板を綺麗にし、終わったあとに消す、ということをやっていましたのと、何度か配布物の配布と回収も行いました。

鈴木　配布物は武井さんが印刷を依頼されてということでしたか？

武井　いえ、大学で用意してある既成のコメントペーパーを配布するというものでした。場所は1105教室で、やはり広い教室です。

赤井　授業中にAV機器の不具合等はありましたか？

武井　不具合と言いますか、授業時にはインターネットに接続して使っているのですが、その速度が遅いというような場合は困りましたね。

柴崎　パソコンは先生個人のものでしょうか？　それとも教務課から貸し出したものですか？

武井　先生個人のパソコンだったと思います。

柴崎　配布物を配る際には、一人一人に１枚ずつというかたちでしたか？

武井　いいえ、前列の学生にまとめて渡し、後ろに回してもらった上で、余った分を回収しました。

仙北谷　1105教室だと、後方にはあまり目が届かないことがあると思いますが、寝ている学生などはいませんでしたか？

武井　私たちSAは最前列に座っていましたので、後ろのほうの様子にはなかなか目が届きませんでした。

仙北谷　教室はかなりいっぱいになるのですね。

武井　そうですね、後ろまで。

中山　授業の様子とか、また後ほど改めて聴きたいですね。

鈴木　では比企野君。

武 井 大 樹
（神道文化学部３年）

比企野　大体同じですが、月曜４限の田原先生の授業がすごい大教室で、学生もいっぱいいましたので、プリントを配る時間をいかに短縮できるかが大変でした。授業の時間をなるべく多く確保したいということで、プレッシャーを感じながら配っていました。授業は2104教室で行われました。

箱崎　その授業は私も彼と一緒に担当していたのですが、履修者数が624名いました。教室のキャパシティが500名くらいなので、いっぱいに入ったと想定して500枚印刷物を持って行きますと80枚くらい余る感じでしたので、実際は400名ちょっと来ていたのだと思いますが、とにかく、時間との勝負

でした。

比企野　そうですね、先生も一緒になって配布作業を行いました。

中山　それで時間はどのくらいかかりましたか？

比企野　行きわたるまでには10分程でしょうか。

柴崎　それは、１枚１枚配ったんですか？

比企野　ええ、結局は１枚１枚配ったほうがいいのです。まとめて配ると、場所によって行きわたらなかったりしますので。

比企野義孝
（法学部３年）

箱崎　勝手に何枚か余計にプリントを取ってしまったり、余っているからといって後ろに回さなかったり、また足りなくても言ってくれない学生がいますし。

比企野　先生ともあまり連携が取れなくて、「３人で配っているのにどうして行きわたらないの？」ということになってしまったりもして。それでプレッシャーを感じながら……。

柴崎　毎回、大体何種類くらいの資料を配付しましたか？

箱崎　多いときで４種類、標準的にはA３で１～２枚くらいです。大きくてぺらぺらしていて、同じような頁がたくさんありましたから、「２種類です、よく見て下さい！」とアナウンスしても、学生は同じものを取ってしまって「あっ！」ということもありました。

赤井　「A」とか「B」とか、プリントにはっきり大きく書いておかないと、そういうことはあり得るね、大きなクラスだと。

新井　印刷するのにどのくらいかかりましたか？

箱崎　A３両面１枚だと、まあ、40分くらいで終わるのですが、ホチキス留めで両面２枚、３枚ともなると、２時間半くらいはかかりますね。

中山　教材を配っている間は授業は止まっているんだよね？

比企野　止まっていますね。

中山　それでもSAがいなければ、10分の休止が、15分、20分と伸びることにもなりかねなかったと。

比企野　もっとかかっていると思います。

新井　まあ、その場合は、教員としては学生にまとめて渡して後ろに流してしまうと思うけれどもね。SAがいなければ、いちいち配るということはなかなかできないでしょうね。

赤井　確かにクラスが大きいと、学生に渡してプリントを流すというかたちにすると、途中で止まったり、資料を余計に取ったりすることがあるから、横から１枚ずつ配って行ったほうが確実は確実ですね、時間はかかるけれども。

新井　500部刷って80部ほど余る、つまり400名程度が来ている。先生も一緒に配ったとして３人がかり。そうすると、大体これで割合が出せる。百何十人のクラスにひとりだとややきついのか。もうひとりいれば、だいぶ楽になるかも知れない。

箱崎　大教室に、かなりパンパンに入っている状態ですから、「学生が大体そろっているようだったら授業前に配っちゃっていいわよ」というときも１回ありました。けれども、まだ前回の授業の積み残しというか、未了の部分があるから「それが終わってから授業の途中に配って欲しい」と言われてしまうと、もう中断するしかない。やっと先週分が終わったというところで、一気呵成にバーッと配る感じなので。

新井　実際のところ、何人いればもう少し楽になるでしょうね？

比企野　まあ、３列ですから、３人いれば……。

箱崎　縦に配って行くと時間がかかるので、本当は、横に１列１列配って流して行くのがいいのですが、そうなると、そのときだけでも助勢が欲しい気はしますね。

新井　そのとき３人いれば、もう少し行けた？

箱崎　そうですね。

新井　そうなると、やはり百数十人で１名ほど。

仙北谷　配るだけだったら、真面目に出てきている学生に協力してもらうというやり方もありますし。

柴崎　まあ、毎回使うのであれば学生にもっと厳しく言って、もう少し早めに行きわたればと思うし、資料の見分けがつきやすくなるように「A」「B」と印を付けるといったことについても、先生にひとこと言ってあげれば良かったかも知れない。気をつけましょう、とか(笑)。

箱 崎 か を
（文学部外国語文化学科４年）

箱崎　そうですね。

赤井　学生の立場からどうか、という言い方をすれば、教員はよく言うことを聴きます。「学生が混同しないように、こういうふうにしたほうがいいですよ」と言うと耳を傾けてくれます。……ところで、田原先生はAV機器は使われましたか？

箱崎　パワーポイントをお使いになりました。特にトラブルはありませんでしたが。

柴崎　最後に何か配布物を回収したり、ということは？

箱崎　いいえ、田原先生の今回の授業は、出席を全く重視しないタイプということで、コメントペーパーも配布しない、出席も取らない、と事前に仰っていたので。

中山　取ろうとしても不可能だろうね。授業アンケートもふたりが回収して配ったのですか？

赤井　いえ、授業アンケートは基本的に、授業を受けている学生に手伝ってもらいます。教員が手を触れないというのが原則

なのです。

柴崎　杉山さんの授業では、実質的に学生は何人くらい？

杉山　教室には結構入っていましたが、正確な実数はちょっと把握しておりません。

柴崎　武井君は？

武井　私も数は把握しておりませんが、教室が一杯になるくらいには来ていたようです。

杉山　配布物については、笹生先生も教材としてプリントは用意されていましたが、ネット上にアップロードしたものを、学生がダウンロードして、というかたちでしたので、私は関与しておりません。

赤井　可能であればそれが望ましいのだけれどもね。

新井　ただ、私も以前にそれをやって、120名くらいの授業で、教材をアップロードするからちゃんと印刷して持って来るようにと言って。けれども次の週、３分の１くらいしか持って来なかったものね。周知を徹底しないと、やっても効果は薄いですよね。教材をアップロードして、学生がそれを落とすということがきちんと周知してできれば、配布時間に充てていた時間をもっと別のことに使えるのに……10分、15分ももったいないし、SAも苦労するし。

鈴木　高橋先生の授業はどうでしたか？

比企野　高橋先生は2101教室で、「アジア経済」の授業に出ておりました。

鈴木　配布物はありましたか？

比企野　そんなに頻繁にはありません、３、４回くらいです。

中山　配布物の話が今出て、それなりに苦労がありそうだと思ったのですが、気になったのは、まずSAが資料を配布したり、機械を操作したりすると。そのあと授業時間は大体90分くらいあるわけですよね。例えば、その間手持ちぶさたになったり、退屈になったりという感覚はありましたか？

杉山　あったと言えばありました。ただ、私の場合は担当した授業が神道の授業で、神道って結構面白いな、と思いながら聴いていましたので大丈夫だったのですが。けれども、経済とかになると、私だときついかなと（笑）。

武井　高木先生の授業は、学生が各自でネット上の教材をダウンロードして問題を解くということをしていましたから、私のほうでは教材がどういうものか判らないので、授業の内容もよく把握できませんでした。授業中は、自分のことを色々こっそりやっていた感じで……。

中山　自分のことというと、例えば？

武井　いえ、まあ。予定を書き出してみたり、そういったことを……。

中山　なるほど、敢えて言えば、何とか時間をつぶした、という感じ。

柴崎　高木先生の授業は、パソコンを学生個々人が教室に持参して行うということですか？

武井　いえ、多分学生個々人が自宅で教材を落として、ということです。

新井　みんなK-SMAPYで落として来るのでしょう。杉山さんの場合、自分用の教材は手元になかったの？

杉山　最初はなかったのですけれど。後半になって先生が、よく聴いてくれるからと私にも配って下さって（一同笑）。それを見ながら聴いていました。

新井　箱崎さんと比企野君は、そんな時間はなかった？

中山　配ってしまえば余裕はできるんでしょう。早く配るというプレッシャーがきついということで。

箱崎　ええ、田原先生は、AV機器とかは授業中はご自身で操作されていますから。授業時には60分くらいは基本的に聴きっぱなしです。

鈴木崇義
（教育開発推進機構助教）

ＳＡの仕事の大変さ

中山　ずばり、今回SAをやってみて、負担感というのはあった？　きついな、とか。

杉山　私は配布物もほとんどなかったですし、楽しかったですし（一同笑）。全然そんな負担感はなかったです。先生も優しい先生でしたので。

武井　私の場合ふたりで担当していましたが、AV機器の準備や配布が終わると特にやることはなかったので、ひとりでも大丈夫だったのではないかとは感じていました。

中山　負担が強いとか、そのようなことはなかった？

武井　ありませんでした。

中山　では箱崎さんと比企野君の場合は？

箱崎　担当した授業の様子を、一応、全部メモで整頓してみましたのでそれを読みます。月曜４限の田原先生の授業では、印刷物が大量にあった。配布する上でプレッシャーも感じた。ただ、配り終えてしまえばそれまでという感じなので、やはり内職して時間をつぶすということになった。特に、印刷物が多いのと、遅れてくる学生が結構多かったために、一番後ろの席に印刷物のストックを置いて、遅刻してきた人に配布物はこちらですよと配布しながら田原先生の授業を聴いていました。ただ、ちょっと自分がテスト前だったら、「申し訳ありません」と思いながら自分の勉強をしていましたね。

柴崎　遅刻する学生って、どんなに遅くなっても教室に入ってくるの？

箱崎　はい、特に閉めているわけでもないので。カードリーダーも田原先生は読み込んでいらっしゃらないので、単純にプリントだけ取って帰っちゃう人もいっぱいいましたよね。

比企野　そうですね。まあ、授業に出ている人はみんな真面目な印象が、すごくありましたが。

箱崎　でも田原先生は怖いから、という面もあったのかも(笑)。

比企野　そう……まあ、怖いというよりは、それが普通なのですけれどもね。

箱崎　普通なのですけれど、まあ、ちょっとおしゃべりが多いと、授業を中断してでも学生カードで確認されて、言い方は悪いですけれども追い出したりとか、そういうこともされていたので。

中山　郁
（教育開発推進機構助教）

比企野　まあ、本当はそれが普通なんでしょうけれども。授業中の雰囲気は、すごく真面目な感じで良かったと思います。あんな大人数だったのに。

箱崎　でも、気分が悪くなって倒れた学生もいました。あれは教室の環境の問題でしょう。

次に、水曜１限の石井先生の授業は、全く同じ授業を私が１年生のときに受けていたので、先生も「あっ、君か」という感じで。教材とかも先生がメールで添付して送って下さったので、それを機構でプリントアウトし、印刷して持って行くというかたちでした。でも実際には印刷は３回くらいしかなかったので、それほど負担はありませんでした。基本的にビデオやDVD等の映像資料を教材として見せる先生でしたので、それらの機器と、パソコンの設定をするという感じでしたね。

赤井　不具合とかはなかったですか？

箱崎　一度、書画カメラがいたずらされていて、明るさが極端に暗くなったトラブルがありましたが、それも再調整すれば直ったので特に問題はありませんでした。教室は1105教室ですね。水曜の１限ということでしたが「宗教学」で神道の必修科目だったこともあり、学生も真面目に出ていて、粛々と進んでいる感じでした。私の場合、本当に「受けたことがある授業」という感じだったので、授業の流れも、先生との打ち合わせも「こんな感じだから」、「はい」という感じで、特に説明がなくてもこちらも判るし、先生も信頼して下さっている感じでしたので、双方向でやりやすい印象がありました。

木曜３限の小越先生、これも1104教室で、こちらは欠席者が結構多かった感じです。

中山　カードリーダーで出席は取っていたの？

箱崎　取っていました。

中山　ということは「ピー逃げ」(読み取り機にカードを通しただけで帰ってしまう学生）も……？

箱崎　ええ、「ピー逃げ」もいたと思います。結構おしゃべりも多かったし。仕事は基本的に印刷物を配布するだけでした。ビデオの操作も毎回ではなかったので……。ただ、配布資料については、A３片面ホチキス３枚止めとかがあったので、印刷の量としては多かったと思います。小越先生は毎回必ず印刷物を配布されましたので、印刷については、ペアを組んでいた高部さんと、大体週ごとに交替でやっていました。

柴崎　印刷は前日にやったの？

箱崎　前日か、前々日にやっておくというのが基本スタンスでした。

次に、金曜２限の大坂先生。この授業も高部さんとふたりでやったのですが、授業形態がちょっと特殊で、毎回ゲスト講師をお招きして講義してもらうというかたちでした。資料についても、500部刷って両面で３～４枚、ホチキス止めというものが多かったので、最長記録３時間半というときもありました。高部さんと交替で印刷しましたが、週によって当たり外れが無きにしもあらず、という感じで……。

新井　３時間半は大変だな。

箱崎　長時間の印刷ですからこちらも遠慮して、他の先生方があまり印刷機を使わないだろうという時間帯を狙って作業をしました。６～７限等の空いている時間帯で――午前中とか、混雑しそうな時間帯は避けていました。

新井　毎回違う人が来るわけだから、資料の量がなかなか読めないんだよね？

柴崎　さすがに資料が当日来た、というようなことはなかった？

箱崎　いえ、それはありませんでした。

鈴木　SAをつける段階で、教員の方々には、授業の３日前までに資料を機構に持ってきて下さいとお伝えしてありますから。その点は先生方に守っていただきました。

新井大祐
（教育開発推進機構助教）

赤井　原則として、印刷物の原稿を機構を通してもらうということにしています。今のところはそれを徹底したいと思うんですね。つまり、便利な世の中ですから、メールの添え付けファイルで資料をSAに送付して、「やっておいてね」というようなこともあり得る。けれどもそれを認めると、責任を持って受理したり、送り出したりするということがどうしても難しくなりますから。今後も原則はそのようにしてゆきたいと考えています。

新井　石井先生の場合は、SAにメールでファイルを送信する際に、機構にも同時送信していただくようにして。メールアドレスをそのために開設して、ワードのデータはなく、必ずPDFで、加工できるかたちでは送らないようにしました。原

理原則から外れているところはあったけれど、でも楽だったでしょう？

箱崎　ええ、基本的にPDFファイルでしたが、機構で受理していただいた上で印刷しましたから、一番事故が少ないと思います。

赤井　大坂先生の話に戻りますけれども、毎回ゲスト講師が変わって、500部を刷ったということですが、配布された資料というのは、その都度使われていましたか？

箱崎　はい、確実に使われていました。

柴崎　余りはどの程度ありました？

箱崎　100枚弱といったところでしょうか。大坂先生の授業は出席重視で、３回休むと一発アウト。携帯電話を授業中使っているのが発見されたら一発アウト。おしゃべりも一発アウト。色々なルールがあるのです。

赤井　それは最初の授業のときに知らせてあるのですね？

箱崎　ええ。

新井　いいですねえ。

赤井　配布物についてですが、私の場合は１週リザーブといって、欠席者のために、翌週まで配布物はリザーブしておくという原則で授業をやっているのですけれど、先生の場合は、100部余ったということは、単純計算して100人休んだということになりますね。そのときに余った資料については、その回だけで処分してしまうのですか？

箱崎　その回だけです。授業が終わると即刻廃棄という。次の週ではゲストが変わってしまうということもあると思いますが。

柴崎　田原先生はどうしていましたか？

箱崎　田原先生は、次の６限、７限に同じ内容の授業を持っていらっしゃったので、「使い回すからいいわよ」、と言って、持って帰っていらっしゃいました。

柴崎　その場合例えば、翌週もしくは別の週に、学生が資料を欲しがる、ということは……？

箱崎　あります。

柴崎　そういうときは直接先生に言っているのですか？

箱崎　田原先生は基本的に、最初の数回は来週用にリザーブしておくというかたちだったのですけれど、次の授業にも同じ資料を配布するからということで、結局、来なかった人に対しては配布しないという方針にされたようです。ただ、他の先生、石井先生や小越先生や高橋先生については、こちらでお預かりして、余ったものについては、次回の授業で欠席者に渡すという提案をしまして、その上で授業が始まるちょっと前にアナウンスをして、取りに来た学生に持って行ってもらうという方式でやっていました。

高橋先生の授業は「アジア経済」で、すごく大きな教室だったのですが、出席率は60％くらいだったと思います。ただ、最終回はすごく多かったですね、やはり（笑）。これでほぼ全員かな、という感じだったので、序盤では150部刷って余ったのですけれど、後半になりますと印刷物180部刷ってきて足りなかったので、恐らく230～40名くらいは来ていたと思います。

柴崎　足りなかったときはどうしたのですか？

箱崎　足りなかったときは、印刷機に走りました。普通はふたりいるので、配布している段階でちょっと足りないということになれば、もうひとりが印刷に走るというかたちで対応しました。高橋先生は３回に１回くらいのペースで教材印刷があり、AV機器は使っておられませんでした。印刷物で大変だったのは、田原先生、小越先生、大坂先生。印刷地獄３連発（一同笑）。

中山　今後、その印刷地獄の先生方をあらかじめ機構でチェックしておいて、うまく配分して印刷できるようなかたちで対応しないといけませんね。

新井　今回、こちらからSAをふたりお願いしたり、ひとりお願いしたりするというとき、その基準としてはざっくり履修登録者数の多い少ないで配分したのだけれど、やはり実際にどういう授業をするかというのは、こちらではなかなか見えない部分がある。大坂先生の授業なんか、確かに名前としては大坂先生の授業ということだけれど、内容としてはそういうわけではない。高木先生の場合は、履修人数は多いけれども、それほど負担とはならなかったということですし、逆に履修人数が少なくても、配ったり回収したりという作業は多いということがあるわけだから、履修登録者数だけを見て、一律に学生何人以上のクラスはSA何人、などと考えたのは、あまり良くなかったということだよね、率直に言えば。

柴 崎 和 夫
（学修支援センター長）

杉山　ただ、人数が少ないクラスは、やはり配るのも楽だとは思いますけれど。

ＳＡ勤務とＳＡ自身の授業との兼ね合いについて

柴崎　SAの皆さんは、自分の履修している授業が勤務時間帯の直前、あるいは直後にある場合、どうだったでしょうか。例えば、自分が受けている授業で質問があったりして、直後のSAを担当している授業に行くのにぎりぎりだったとか、そういう大変さというのはありましたか。

杉山　ありました。授業後に質問しに行きたいと思ったけれど、ちょっとこのあとのSA業務に間に合わなくなってしまうから、ということで諦めたことがあります。

柴崎　勤務時間帯の直前に授業がある場合と、直後の場合とでは、どちらが大変ですか？

箱崎　月曜４限の田原先生の場合がかなりきつかったです。３限に必修の英語があったのですが、それが２号館１階の2105

教室。勤務場所の隣なのですが、それでも一度機構に行って、マイクと印刷物を持って、また戻ってこなければいけない。まず機構に寄らなければいけないので、その距離が大変でした。自分の授業がチャイムと同時に終わって、すぐに出られたら良いのですが、その後10分間の休憩時間内に、まず機構に行って、印刷物の確認をして、機構の方にハンコを押していただいて、それから印刷物を抱えて走って。マイクの準備が必要な場合は教務課にも顔を出してから、マイクを持ってまた授業に行かなければならないと。これはかなりきついと感じます。

柴崎　やはり、勤務時間の直前に自分の授業があるというのは、本来あまり望ましくない状況だよね。避けられるなら避けたほうが良いと。

箱崎　かなりぎりぎりだったときがありますね。金曜４限の高橋先生の授業で、３限に博物館実習があって。場所はメディアセンターの奥で、しかも実習ですから、片付けなどでぎりぎりまで押す場合があって。ぎりぎりに機構に駆け込んで……まあ、その授業ではペアを組んでいる比企野君がいましたから、まだ大丈夫という安心感もあったのですが。

新井　授業が前後に入っていたりする場合には、ふたり配属して、どちらかが飛んで行かなければならないような場合にはもうひとりが、というように一応配慮はしたけれども。ただ、そうともなれば、残りのひとりのほうにはかなり負担がかかるということもあり得るよね。毎日ひとりで、相方が間に合わなかったらプリントをひとりで配らなくちゃいけないというような事態も起こりかねないわけだから。

中山　比企野君自身は、そんなに問題はなかったの？

比企野　僕は勤務時間の直後に授業が入っていましたが、やっぱりハンコをもらえなくて遅れちゃったりということはありましたね。

中山　武井君はどう？

武井　直後の時間に入っていましたが、同じ建物の中でしたので、多少ぎりぎりでもエレベーターに駆け込めばどうにかなる、という感じでした。

鈴木　ふたり以上いる場合には、急いでいるほうが、もうひとりに出勤表を託してから授業に行くというケースが何回かあったかな。こういう場合を考えるなら、複数いたほうが良いかも知れませんね。

赤井　エルダー・サポーターをお願いする場合にも同じような問題があって、彼等は２年生から４年生でしょう。特に、２年生と３年生は時間割もかなり混むよね。４年生になってから、ようやく少しだけ余裕ができる、普通の履修パターンではそんなところでしょう。そうすると、２年生、３年生にサポーターなりSAなりをお願いするときに、担当する授業の前後が１限ずつ空くようであればそれが一番望ましいのだけれど、それはかなり困難でしょうね。時間を何とか上手に使う。事務手続きの滞りをなるべくなくす。それから、教室の移動についても考えに入れなくちゃいけないだろうね。

ＳＡ制度の改善点について

赤井　今後のSA制度の改善についてお聞きしたいと思います。こうして欲しい、というのがあれば是非。

鈴木　自分がやってみての範囲で構わないので、もっとこういうふうにやってみれば良かったのに、とか。

杉山　私自身は、話を聴いていると、すごく楽だったようですね（笑）。勤務場所も、ちゃんと行く途中で機構に寄れるような位置でしたし。本当に条件が良かったので、ひとりでも十分でした。

柴崎　率直に言って、手伝いには行ったけれども、本当は自分がいなくてもうまくいったんじゃないかと感じたことはなかった？

杉山　私自身の印象としては、私が居なくてもどうにかなっただろうとは思います。ただ、笹生先生が仰っていましたが、金曜にも授業を持っているが、そちらではひとりで準備して、片付けもしてということで、ちょっと寂しい、と仰っていました（一同笑）。片付けをするときも、学生は終わったらすぐに帰ってしまって寂しいので、いてくれて良かったと（一同笑）。そういうことはありました。

仙北谷穂高
（教務課長）

赤井　AV機器の準備や、黒板を綺麗にしてもらうというのは、些細なことのようだけれど、教員にとっては授業を展開して行く上で、大変負担が軽減されるんですよ。まあ、寂しいというのは言葉のあやだと思うけれども（笑）、助かった、ということなのだと思いますよ。

鈴木　ときには受講している学生がそういったことを手伝ってくれる場合もあるのだけれど、杉山さんがそういう役割を果たしてくれたというのがあるのでしょうね。では武井君。

武井　ふたりで担当していたのですが、仕事自体は人手がそれほど必要な感じではなかったので、ひとりでも大丈夫だったのではないのかな、という印象はありました。ただ、もうひとりの鈴木さんは来るのがぎりぎりで、私は私で直後に授業があるという感じだったので、時間の都合に関しては、お互いで補い合えるという面はあったかも知れません。

鈴木　仕事内容としてはひとりでも対応可能だったけれども、前後の時間の関係でいえばふたりで良かったと？

武井　そうですね、次の時間に私が試験で、急がなければというときには、出勤表を鈴木さんに預けて行ったこともありましたし。

鈴木　授業の前には武井君が十分な余裕を持って教室に入っているという感じで？

武井　教員室の前で、次の授業に持ってゆくものを受け取り、先生が直前の授業の教材等で、次の授業では使わないようなものを置きに行ったりされている間に、こちらはAV機器の準備やら配布やらを行うという感じのことができていたので、まずまず連携が取れたかなと思います。

鈴木　比較的うまくやっていたと。では、一方で印刷物が大変だったというおふたりのほう、まずは比企野君から聞いてみたいのですが、改善点等は思い当たりますか？

比企野　業務内容が限られているので、やることがなかったかなと。忙しいときは大変なのですが、それが終わってしまうと少し物足りない感じもしました。かといって、他に何ができるかというのも思い当たらないので。その上、一緒にやっていた方が大変しっかりしていたので（一同笑）、機材とか全部設置してくれましたし。僕はまあ、楽というか、心強かったですね。

鈴木　では、その心強い箱崎さんのほうから（笑）。印刷物を配布するときは大変だけれど、あとの60分は自分の時間になってしまう。一方で印刷物を自分で印刷するとなると、枚数によってはとてつもなく負担がかかると。空いている時間もあれば、授業に張り付いていなければならない時間があって、もうひとつは自分で印刷しなければならない時間がどのくらいになるか判らない、というのが、結構大変だったのではないかなと感じましたが？

箱崎　うーん、説明がしづらいのですが、私は結構勉強が好きなので、授業のただ聞きができる（笑）。他のことをしちゃおうと思っていたのですが、結構真面目に聞き入ってしまいました。「アジア経済」とか、経済の授業はあまり出なかったので、ああ、こんなこともやっていたのか、と。高橋先生の授業とか、テスト受けてもいいですか、というくらいで（一同笑）。一方で、興味のない授業に配属されて、かといって自分の時間も作れないというような場合には、ちょっとつらいのではないかと思います。あと、その先生の授業がどんなタイプかというのも、本当に行ってみなければ判らない。履修者の態度によって先生が途中で授業の方針を変えるというパターンもありますし、それを機構が把握するのは、無理とは言いませんが難しい。それを、最初の１回、２回見てこの先生の授業はこのパターンだから、SAは６人にしよう、としてしまうのは無理があります。例えば最初の２、３回を見て、ああ、この先生は最初の15分ぐらいはSAを５人くらいつけて、あとの時間はそのうち３人は帰ってきていいようにしようとか、柔軟な対応も必要になると思います。

柴崎　今回のトライアルで、そういう情報も少しは集めることができたね。

箱崎　ただ、基本的には、先生方からは大変好評だったという印象があります。

柴崎　箱崎さんは今回、５コマも担当されたわけですが、率直に言って、普通のSAに５コマは多すぎると思いますか？

箱崎　はい、多すぎると思います（笑）。

柴崎　授業が聴けるとは言っても、拘束されるから、学生としては自分の勉強をする時間も削られてしまうのですよね。率直に言って、ひとりあたりどの程度のコマ数が適切だと思いますか。

箱崎　ひとりあたり３コマくらいが限度かと思います。ただ、それもまた２年生、３年生のSAにとってはしんどいのではないでしょうか。私は４年でかなり空いている時間があったから何とかなったという感じですので。

ＳＡが必要な授業数とＳＡに応募する学生数との兼ね合いについて

柴崎　単なる人数だけから言えば、SAを付けるべきだと判断される授業は他にも少なからずあった。ただ、いざ蓋を開けて、授業が始まってみないと、どの授業が大人数になるかということは、本当には判らないものがあるよね。

箱崎　田原先生の授業は、先生ご自身、あんなに来るとは把握していらっしゃらなかったようで。

新井　ああ、びっくりしてらっしゃったものね、最初に行ったときに。

柴崎　いつも受講者が多い先生は、ある程度検討はつくのだけれど、ただ、時間割ができた結果として、ある年は増えるとか減るとかいうこともあるから、実際にはなかなか読めないんだよね。

新井　最初にSAの配属先としてお願いしようと思っていたときに、田原先生に「先生、履修者が～人いますけど、どうしますか」と言うと、「え、そんなにくるの」と……。

仙北谷　履修登録者数はK-SMAPYを見れば判るのですけれどもね。

柴崎　だから、SAを頼むにしても、どのくらいの人数頼まなくちゃいけないかというのが、あらかじめ一定程度把握できるようでないと。

中山　それから、SAの募集段階で、何人くらいの学生が応募してくれるかという問題もありますしね。

柴崎　応募者がたくさんいれば、申し訳ないけれどもこちらで制限して採用、ということができるけれども。少なかったときに、誰にどこの授業に行ってもらうかという問題も出てくるだろうね。

赤井益久
（教育開発推進機構長）

中山　箱崎さんの話ではないけれど、一番いいのは、自分が聴きたい授業のところに入れれば良いのですけれどもね。そう

も行かないでしょうし。

箱崎　それに、SAを付けたいと思うような大人数の授業というのは、大抵授業が一番多く開講されている時間帯に設置されているので、SA自身も、恐らくそのコアな時間帯に自分の授業を入れてしまっている可能性が高いのですよね。

柴崎　そうそう。応募者があっても、その時間帯に行ける人がいるかどうかという問題もあるんだよね。

ＳＡ業務を滞りなく行うためには……

赤井　あと、考えておかなければいけないのは、リスクヘッジですね。皆さんも大学に出てきたときに、交通機関が止まったり、体調を崩してとても出られるような状態じゃなかったりすることがあるでしょう。そのときに例えば控えのSAが機構にいて、ぱっと対応できる体制を作れないかと考えているのですけれども。そういう経験は皆さんありませんでしたか？

鈴木　電車についてはなかったですね。ただ、今日は欠席していますが、高部さんがインフルエンザになったことがありまして。あのときは確か小越先生の授業で、そのことについて連絡を差し上げたことがありました。

箱崎　ただ、そのときは私が来ていましたから。本当に穴が空いちゃったというのはないはずですよ。

杉山　１月に所用で一度お休みさせていただいたことがあります。そのときは、次の週は休ませていただきたいということを先生にお伝えした上で、業務内容を書いて機構に提出しました。

赤井　そのときはバックアップを頼みましたか？

鈴木　ええ、お願いしました。職員の方に代わりに対応していただいて。

赤井　事前に欠勤することが判っていれば対応できるのですけれどもね。そのときにならないと判らないということもあるしね。

比企野　僕の場合、就職活動の面接とか企業説明会に急遽参加することになって、それで１回お休みをいただいたことがありますが。

箱崎　やはりひとりしか配置されていないところは、確かにリスクが高いということはありますね。水曜１限などは私ひとりでしたから……１限って、本当に電車の遅延が多かったので、それを考慮してかなり早く家を出ていました。30分くらいは遅れても大丈夫なくらいに。

赤井　石井先生の授業？

箱崎　はい。

大教室授業の受講態度

新井　授業中に携帯電話かけに出て行ったりする人とかいないの？

箱崎　いっぱいいますよ（一同笑）。ジュース買いに行っちゃったりする人もいるし。

中山　そういうときに、田原先生は結構注意していたそうですね。他の先生はそういうときには……？

箱崎　いえ、注意は特には。小越先生と高橋先生の授業で言えば、本当に、大きな経済学部の授業ってこんな感じなのかな、っていう。ちょっと度肝を抜かれるというか……（一同笑）。私は文学部の外国語文化学科で、語学のクラスですから、受講者30人くらいで皆顔が割れているような授業ばかり出ていましたので、もう、ただ大きな授業でやって、ただ聴いて、教室の一番後ろに張り付くように座っているとか、そういう概念が全くなかったもので（笑）。

比企野　僕は法学部ですが、そこではどちらかというと経済の授業形態に近いです。ですから、文学部は少人数の授業で羨ましいですね。ただ、大きな授業だと、個人個人に投げかけるのではなくて、全体を相手にしているから、後ろのほうでつい色々と別のことをしてしまうようになる、という気分も判らなくはないです。

柴崎　難しいですね。教員の力量というのもないわけではないのだけれど。

新井　自分が学生の時どうだったと言われるとね……（笑）。まあ、とにかく、学生同士のトラブルはまずはなかった、回避できたと。

柴崎　それが何よりだよね。

鈴木　SAの皆さんからは、特に学生に対して注意とかはしなかったんでしょう？

新井　箱崎さんは我慢したんだろう？　注意したくなるの。

箱崎　いえ、別に。「へぇ、すごいな」と思っているだけでした。

柴崎　言ってあげればいいんだよ。先生に（笑）。

新井　先生を注意すりゃいいんだな（笑）。

柴崎　まあ、それが教員側の課題であることは確かだな。難しい。

おわりに

鈴木　今日は長時間にわたってありがとうございました。先生方もありがとうございました。箱崎さんは卒業ということですが、後輩の３人はまたエルダー・サポーターにも登録してくれたということなので、SAのほうも、可能であればまた改めて登録していただければと思います。

一同　ありがとうございました。

平成22年度前期は、21年度に続く第Ⅱ期トライアルとして、30名の体制で運用中です。新たにコンピュータ実技演習の授業にも出向するなど、業務の対象範囲を広げつつ、本格導入に向けて加速しつつあります。この対談で話し合われたこともヒントとして活かしつつ、教員にとっても学生にとっても、より有意義な制度にできるよう、検討と改善を重ねてゆきます。

経済学部のＦＤ活動

FD（ファカルティ・ディベロップメント）とは、本来、大学の各学部の先生方が自主的に自分たちの教育を良くしてゆこうとする活動です。ただ、本学では、様々な試みが行われてはいるものの、どちらかと言えば全学的な講演会や研修会の開催・参加という面にかたよっていた感があります。その一方、学部での教育改善活動については、まだ暗中模索の状況にあるのが現実です。学部のFD活動をどう行ってゆくかは、多くの先生方が興味をもっておられることと思います。

そのなかで、本学の経済学部は、学部共通必修科目を中心とした授業改善や、独自の共通教科書の策定、授業の撮影や合評会の実施等、盛んな活動を行っています。そこで、平成21年度に開かれました第３回教育開発懇話会では、経済学部の先生方をお招きして、学部での様々な教育改善の試みをご紹介いただきました。

対談日時

平成21年11月12日㈭　16：00～18：40

会　　場

國學院大學渋谷キャンパスAMC棟５階06会議室

発表者：（五十音順、敬称略、所属等は開催当時）

田 原 裕 子（経済学部教授）

橋 元 秀 一（経済学部教授）

司会：**中 山　　郁**（教育開発推進機構助教）

学部共通必修科目「日本の経済」での取り組みを中心に

経済学部

橋元　秀一 教授

はじめに

経済学部は30年あまり、経済学部経済学科のみの学部として歩み続けて来た。1980年代半ばまではそれでまずまず何とかなっていたと言ってよい。しかし学生の質の変化に加え、学問的にもパラダイムシフトと呼ばれる事態を迎えて、経済学のそれまでの常識的枠組みが大きく揺らいで来るにつれ、学部の教育内容についても、果たして今のままでよいのかという懸念が抱かれるようになった。やがて、現水準を維持する学生の確保ということを考えるのであれば、経済学科１科のみではニーズに応えられないのではないかという声も上がるに至った。私が着任した平成４年頃は、ちょうどそういう議論が始まった時点である。静かに学究生活を送りたいと念願して研究所より転職してきたのだが、途端に学科改組の波に呑み込まれた感がある。以下、経済学部におけるFD（Faculty Development）活動の概要について報告する。

１）学科再編の経緯

経済学部の学科改組は、平成８年度より第一部に経済学科・経済ネットワーキング学科を、第二部に産業消費情報学科を作るかたちで出発した。しかし、学生は第一部を志向する傾向が強く、第二部の学生確保は困難であった。そこで13年度より昼夜開講制へ移行、経済学科・経済ネットワーキング学科の2学科とし、産業消費情報学科は経済学科のコースとして発展的に改組することとなった。経済学部の昼夜開講制は、昼と夜のどちらで受講するかは学生の希望を尊重した。その結果、夜間受講を希望する学生が急速に減少していったことから、夜間主の維持は困難となった。そこで、17年度より、夜間主の定員を利用して経営学科を設置し、現行の３学科体制へと改組したのである。

これによって、経済学部がどのような姿で社会的な役割を果たしつつ生き残っていくかということについて、制度面での基本的な仕上げがなされ、おおよそ整ったと言えよう。かくして、本格的に中身の検討・充実へ進むことができる地点に到達した。17年度以降、経済学部は

FD活動へ本格的に取り組むこととなったのである。

この過程で、特に重要な問題として浮かび上がってきたことのひとつが、学部の教育目標はいかにあるべきか、ということであった。経済学部としては、カリキュラムを現代の大学に相応しい、社会的な役割に真に応え得る内容にすることを目指す限り、従来の規定は学部の教育目標たり得ないと判断せざるを得なかった。そこで平成21年度の学則改定において、現代の社会と学生の状況に応じた教育内容をめざし、「経済と経済学の基礎力と日本経済に関する知見を兼ね備え、社会に貢献する専門的教養人を育成する」という教育目標を掲げるに至った。端的に言えば、「専門的な基礎力を持つ教養人の育成」を焦点とすることが、経済学部の教育目標として明確にされたのである。

戦後の大学教育の流れの中で言うならば、この教育目標の設定こそ大転換であった。そのことの持つ意義というものを、私たちは、まさにFDの中で本格的に具現化してゆかなければならないと考えている。平成17年度から実施してきたFDの取り組み、そして21年度の学則改定における教育目標の明確化は、まさに、今後、この教育目標に沿って、全面的にカリキュラムの内容の実質化に踏み込まなければならないという、経済学部の格闘であり、決意宣言だったのである。

２）経済学部共通の必修科目の推移

以下、学部必修科目「日本の経済」を中心として学部FD活動の推移を報告する。まずは学科再編の中で、学部必修科目がどのように推移し、「日本の経済」がその中でどのような位置づけを有するか説明しておきたい。

経済学部では、新学科を作った時点で、何を最も基礎的な科目とすべきかという議論をしつつ、平成８年度から「基礎経済」「日本経済の現状」「経済演習Ａ」「コンピュータと情報A」の４つを必修科目とした。11～12年度に昼夜開講制への移行の検討がなされる中で、「基礎経済」と「日本経済の現状」の中から、学生に理解させる最低限の内容をもっと絞り込むべきだという議論が行われ、そこから13年度に両科目を統合した「日本の経済」が誕生する。この科目は、日本経済の現状を理解するため、理論的かつ経済学的な考え方を最低限入れ込みながら、経済と経済学の最も基礎的・初歩的な入門科目を作ろうという考え方のもとで設けられた。こうして「日本の経済」「基礎演習」「コンピュータと情報A」を最小限の必修科目として設定することとなった。夜間主廃止以降も、基本的にその枠組みは変わっていない。しかし、この科目の重要性ということについては認識が一段と深まり、学部のFD活動が始まるきっかけとなったのである。

３）「日本の経済」授業改善の推移

既に述べたように、「日本の経済」は平成13年度から現行の体制で開始されている。内容的に言えば、既に８年度には始まっていたと言ってもよい。しかし、16年度までの９年間は、一応共通シラバスはあるものの、５～６名の担当教員がそれぞれの責任と判断において行っていたため、その授業内容に少なからぬバラツキがあった。学生の側からすれば「当たり外れ」があるため、不公平感も生じてくる。そればかりか、専門科目に進んだとき、同じ必修科目を履修しているにもかかわらず学生の間に明らかなレベル差が見られた。このような現実を、専門科目を担当する教員があちこちで経験するという事態が広がっていたのである。何のためにカリキュラム改革をしたのか、ということが問われるような事態が続いていたと、残念ながら言わざるを得ない。

それ故、学科再編の動きの中で、カリキュラムや必修科目の実施方法について、教授会や教授会懇談会で毎週のように議論を重ねていくこととなった。その結果、議論の中で形成されてきた共通認識に基づいて授業運営を行うべきだという雰囲気が醸成されてくる。そういう意味で、平成17年度からのカリキュラムを確定する段階では、自ずと、制度の改編から内容の改善へと教員の意識が向かっていくこととなった。

もっとも、それぞれが担当する専門領域や科目の状況によって、学部内にそうした認識が充分共有されていない現実もあったことは確かである。しかし、カリキュラム全体について、教授会レベルでそのような共通認識の形成を待っていたところで改善は遅々として進まない。できるところから、とりわけ全ての基礎となる必修科目から着手しようということで、「日本の経済」「基礎演習」「コンピュータと情報A」に重点的に取り組むことになっ

たのである。まず「日本の経済」で、担当する５～６名の専任教員が取り組みを開始した。また「基礎演習」は大半の専門教員が担当しているので、基本的には教授会レベルで合意形成を図ることになる。そして「コンピュータと情報A」は、専任教員を中心に非常勤の教員との集団を作る。このように、３つの必修科目において、それぞれの特性を活かしつつ、それぞれの状況の中で改善の取り組みを始めたのであった。

「日本の経済」について、次のように進められていった。まず、平成13～16年度の状況を踏まえ、17年度には授業内容を概ね共通化すること、また、授業内容が共通であるならば、試験内容も共通化しなければならないとの合意を図った。それに基づいて、授業内容のレジュメ作りを行い、その内容に即した統一試験を行うこととした。さらに、授業改善について学生の評価を知るため、授業アンケートを独自に作成し、その結果を分析・検証していった。「Plan・Do・Check・Action」という言葉が本学でも聞かれるようになったが、経済学部はそういうプロセスを自ずと進めてきたと言ってよいかと思う。

平成18年度には、そうした取り組みの点検と整備を行い、大体内容的には満足のいくレジュメができあがったので、19年度中にこれを文章化して教科書を作成することとした。学部の共同研究費を利用させていただけたことから、20年度より教材として配布した。また、特色ある教育研究予算を得たこともあって、21年度にはテキスト冊子へと改訂し、22年度にもさらに小幅な改訂を行い発行した。

併せて、平成19・20年度には授業のビデオ撮影も行った。内容的な検討とはまた別に、それぞれの教員が実際の授業をどのように行っているか、どこに重点を置いて説明しているかという実態は、教員間でもなかなか互いに学び合う機会がないのが現実である。そこで、映像で記録し、それを見ながら感想や意見を交換してはどうかと考えたわけである。その章についてはその先生が一番専門である、という授業を選んで映像化したので、それぞれの授業風景を見ながら、「ああ、この章では、こういうところに力点を置くのか」「こういう説明のしかたをするのか」というようなことを、その分野が専門でない教員が見て学ぶことができるという試みであった。これらの映像資料を学生の復習等に用いることも検討してきたが、変化の著しい経済・経済学の状況から考えて、前年度の授業をそのまま流用するわけにはゆかないといった問題がある。そこで、21年度にはトライアルとして、國學院大學栃木高校で経済学部が独自に開講している高大連携授業「日本の経済」集中講義の公欠者に限定して、高校教員の指導の下で利用してもらう試みを行った。

このように、教科書作成・映像化による相互検討と改善・統一試験・独自授業アンケートの実施と分析という取り組みを進めながら、この平成21年度までの地点に私たちは立っている。

4）これまでの成果

以上「日本と経済」を中心とするFD活動について述べてきた。その成果として、次のようなことが言えると思う。

端的に言えば、授業内容が統一化できたことである。無論、完全な統一などということは不可能であるし、望ましいことでもないだろう。そもそも経済学は、研究面において、例えばマルクス経済学、近代経済学というように、研究方法や理論ベースが非常に異なる状況があるため、共通のものの見方・考え方をとることが簡単ではない。にもかかわらず、概ね７～８割は共通、あとの２～３割は個性があってもよいという方向で統一化が進められた。学問的には見解の異なる教員たちであるが、教育に対する姿勢においては共通するものがあったからこそ可能となったと言えよう。学生が社会人として生きていくために何が必要か、また、専門学修へ進んでいく上で何を教えるべきかという視点から議論を尽くし、それぞれの学問分野のよいところを活かしつつ、最低限伝えるべき事柄を議論しながら統一化を図るという作業を進めていったからこそ、達成し得たのである。また、「日本の経済」は、基礎を学ぶと同時にその後の学びのメニューを提示する授業でもある。それができているかどうかという視点からも議論を重ねた。そうしていく中で、協力し合う集団が形成されてきたということが言えよう。さらに、教科書作成の努力は、成績評価の統一・客観化の大切さも浮かび上がらせ、それを実現したことも大きな成果であった。

ただし、これらの成果について、教員の自己満足とし

てではなく、客観的に評価することができるかどうかが問題である。これについては、授業アンケート結果から、全体の傾向をある程度把握できる。平成17年度は従来の授業内容をとにかくレジュメ化するという、まだ充分に集団的な内容が練られていなかった段階である。授業の理解度について、全体としてはどうであったかという設問に対して、「よく理解できた」「だいたい理解できた」という回答は、合わせて３割程度であった。それが、レジュメの作成が進むに従って、18、19年度にはおおよそ50％あまりの学生が「よく理解できた」「だいたい理解できた」と回答している。明らかに効果が上がっていると言えよう。しかし、平成21年度の結果も49.5％であり、引き続いて改善を進めていく必要を示しているように思われる。

おわりに

今後の課題について述べておきたい。第一に、ここまで述べてきた取り組みを一層推進し、「専門的基礎力のある教養人」育成のため、最低限の内容を備えた教科書の更なる改善を行っていくこと。図表を増やすなどの工夫を加えて、より読みやすい理解しやすいものにしたいと考えている。第二に、映像の活用方法について、技術的な問題・内容的な問題を含めて今後議論を深めていくこと。第三には、学科基礎科目、専門科目など次のステップの学修に「日本の経済」での学びをどう繋げていくかという問題がある。例えば私が担当している日本経済の専門科目の場合、学生に「日本の経済」で学んだことがどの程度定着し、活かされているかと言えば、かなり心細い状況がある。これをどう改善していくかが次のステップの大きな課題となろう。そして第四に、学生の理解度のさらなる向上である。現実的な目標としては、８割程度の学生が理解できたと回答してくれるレベルまでもっていきたいと考えている。これまでの独自授業評価アンケートの結果を、さらに詳細に分析しつつ、より具体的な改善課題を明確にしていきたい。

経済学部におけるFD活動の現状と課題：「基礎演習」を通じた取り組み

経済学部
田原　裕子 教授

1.「基礎演習」のカリキュラム上の位置づけ

経済学部ではFD活動の一環として、同一の科目（群）を担当する複数の教員が中心となって授業内容・方法を共有し、改善・向上を図る取り組みを行っている。具体的には「日本の経済」、「基礎演習」、「コンピュータと情報Ａ」、ならびに「フィールドスタディ」を核とする実習関連科目などが挙げられるが、中でも「基礎演習」は学部の全専任教員が関わって継続的に進められていることから、FD活動の柱ともいうべき科目である。

まずは「基礎演習」の本学部におけるカリキュラム上の位置づけを整理しておこう。現行の履修要綱では、セメスターごとに「基礎演習Ａ」(学部必修科目、１年前期、２単位）と「基礎演習Ｂ」(義務履修科目、１年後期、２単位）の２科目に分かれている。現在は28クラス編成で、１クラスの学生数は概ね21～22人である。

経済学部の導入教育的な科目として以前より「経済演習Ａ」があったが、「基礎演習」と名称変更し、経済学部の導入教育を担う科目として明確に位置づけられたのは平成13年度カリキュラム以降であり、平成20年度入学者までは学部必修科目として１年前期に配当されていた（２単位)。その後、後述のような積極的なFD活動の成果として、平成21年度以降入学者からは１年後期に「基礎演習Ｂ」を新設することで、事実上の「通年化」を実現した（これに伴い、それ以前のカリキュラムにおける「基礎演習」は「基礎演習Ａ」に名称変更)。Ａ、Ｂでクラスの入れ替えや担当教員の変更はなく、各教員が具体的に定める年間スケジュールに沿って、１年間同じクラス・担当教員で行う。基礎演習Ｂは必修科目ではないが、義務履修科目[1]として履修上の制約を設ける

ことで学生全員の履修を促している。

また、基礎演習Ａの担当教員がクラス担当を兼ね、１、２年次のクラス担当となるほか、卒業時の証書授与もクラス単位で１年次のクラス担当が行うなど、学修支援上の要にもなっている。

２．改革の背景と動機づけ

平成13年度に導入教育科目として経済学部の専門教育科目に位置づけられた基礎演習であるが、当時は、授業運営はすべて各教員の裁量に任され、授業内容はもちろん、教育目標についても教員間で相当大きなバラツキがあったようである。

こうした状況に対して、「同じ科目なのに、授業内容や評価基準がバラバラなのは問題ではないか」「何をどうやって教えればよいのか、わからない」といった声が出始めた。そこで平成15年５月に教員調査[(2)]を実施し、各クラスの教育目標、具体的内容、評価方法について情報を集めた。これらは本来、シラバスに明記されるべき内容であるが、基礎演習は代表執筆の共通シラバスのみなので、ほかの教員がどのような内容の授業を行っているのか、知るすべがなかったからである。調査結果については、この時点では踏み込んだ分析は行えなかったが、回答結果をそのままとりまとめた冊子を全教員に配布し、本学部の教授会懇談会[(3)]で調査結果について議論したことで効果的な実践事例や参考資料の情報の共有がはかられた。また、各教員が自分の授業を他の教員の実践に対して相対化することにもつながり、学部FD活動の素地が醸成された。

大きな転機をもたらしたのはこの頃から深刻に意識され始めた入学者の多様化に伴う以下のような問題である。入学時学力診断における２コブ現象に象徴されるような学力格差、授業を受けるための基本的スキルを十分に身につけていない学生の増加、不本意入学や「燃え尽き症候群」で大学生活になじめない学生の存在など、個々の教員の授業改善努力では対応しきれない問題が大きくなるにつれ、こうした問題が一層の深刻さを増す前に何らかの取り組みをしなければならないという危機意識を多くの教員が共有するようになった。

おりしも中教審の「新しい時代における教養教育の在り方について」(平成14年２月）などを受けて導入教育が大学改革の柱として脚光を浴びるようになり、他大学で次々と取り組みが始まったことから、基礎演習の改革に真剣に取り組もうという機運が経済学部でも高まった。

３．取り組みの内容

３．１　平成17年度～18年度の取り組み

基礎演習の改革のために手始めに行ったのが「平成15年調査」の分析である。平成17年度の経済学部教務委員会が中心となって分析した結果、①教育目標については、大学での学修に必要なスキルの修得を重視する教員と、経済学の入門的な授業として位置付けている教員に大別されること、②具体的な内容についても、学生の報告や討論が中心のクラスと、教員の講義が中心のクラスに分かれ、③学生が取り組む課題や報告の内容・回数にも大きな差があることが明らかになった。また、④評価についてはいずれのクラスでもＡ＋やＡが大部分を占めるものの、明確な評価基準を設けている教員は全体の１／４に過ぎないことも判明した。

以上の分析結果を本学部教授会[(4)]で議論した結果、①学生間の不平等感を除去するために成績評価に際して２／３以上の出席を単位認定の要件とする、②多くの教員が必要であると考えていたにもかかわらず、同じ水準で授業することが難しかったスキル（具体的には情報リテラシーと履修指導）については、より専門的な知識を有する担当事務職員の力を借りて図書館ガイダンス、履修ガイダンスを各クラスで実施する、ということを合意にこぎつけ、平成18年度から実施に移した。

続いて平成18年５月に再度、教員調査を行った。その結果、平成15年調査と比較してテキストの読み方やプレゼンテーションの方法などのスキルの修得を重視し、報告やレポートを課す教員が増えたことが確認できた。こうした変化を追い風に、教務委員会では他大学の導入教育の実態や市販の教科書の分析を進め、「これからの経済学部の導入教育に求められる内容」をリストアップし、学部教授会懇談会[(5)]に上程した。

懇談会では、リストであがっている項目の必要性は理解できるものの、半期ですべての項目を教えるのは不可能、30人～40人のクラスではきめ細かな指導は難しい

という意見が多かった。そのため、基礎演習の通年化と少人数クラス化が当面の課題となった。また、具体的な教授方法がわからないという意見も少なくなかったため、再度、教授会懇談会を開催して意欲的な実践事例を紹介することでノウハウの共有化を進めた。

一方で、基本的なスキルを身につけて入学している学生にとっては、そうした内容の授業はかえって意欲をそぐ結果になるのではないか、という反対意見も根強かった。そこで、学生を対象として独自の授業評価アンケートを実施し、基礎演習の内容に対する評価と、基礎演習で何を教わりたいかについて調査することにした。その結果､｢基礎演習は役に立ったか｣という質問に対しては、回答者の56.7％が「とても役立った｣｢かなり役立った」と答え、教育効果が確認できた。ただし、クラスによるバラツキが大きいという問題も同時に明らかになった（図１）。また、基礎演習で教えてもらいたい内容については、「レジュメやレポートの書き方｣｢経済学の勉強方法｣｢ディスカッションの方法｣｢具体的な履修指導」などを「とても必要｣｢かなり必要」と答える学生が８割以上に達し、基礎的な学修スキルに関する学生のニーズが高いことが確認できた（図２）。

３．２　平成19年度～21年度の取り組み

上記の課題を受け、まず19年度には20人クラス[6]の実現にこぎつけた。少人数化のためにはクラス数＝科目担当者数を増やさざるを得ず、時間割編成の自由度や教員の担当科目数に影響が生じることが懸念されたものの、最終的には授業改善のために全教員が合意することができた。また、成績評価の厳格化・共通化も一層推し進めた。すなわち、出席要件を厳格化して全クラス共通のルールとした。成績評価については、「授業内容に学生によるレポート作成｣｢報告、発言またはコメント」を必ず盛り込んだ上で、学期の始めに評価項目を学生に公表することを義務付けた（資料１）。このことを受け、平成19年度以降は各教員が具体的なシラバスを5月の連休前までに教務委員会に提出し、冊子にまとめたものを全教員が共有し、前期末の教授会懇談会で議論することを慣例化した。この年に実施した授業評価アンケートでは、「とても役立った｣｢かなり役立った」の合計値が66.8％と10ポイントも上昇したことから、さっそく少人数クラス化の効果が確認できた。

続く20年度には、もう一つの課題である「通年化」に向けた準備を進めた。まず、通年化することで授業内容が散漫になるのではないかという懸念を払しょくするため、教務委員会がさまざまなタイプの年間授業計画モデルを作成して教授会[7]で例示し、各教員の具体的なイメージづくりに努めた。また、導入教育の目標を①大学で学ぶための準備、②基本的な学修スキルの修得、③専門教育への導入・問題意識の醸成、の３つに整理し、それぞれの目標について具体的内容を「基礎演習に盛り込むべき内容」にまとめ、教授会に上程した（資料２）[8]。その結果、義務化には至らなかったが、努力目標とすることで合意することができた。さらに、議論を通じて学修スキルの授業方法に自信が持てないという教員が少なくないことが明らかになったため、教務委員会で教科書の選定を行い、21年度から全クラスで共通の教科書[9]を採用することが承認された。

平成21年度には経済学部専門教育科目の大幅なカリキュラム改革にあわせて「基礎演習Ｂ」が新設され、基礎演習の通年化を実現した。通年化の成果については、現在、平成21年度に教育開発推進機構の補助を得て実施した授業評価アンケートの結果を分析中である。教授会懇談会では、通年化することで「書かせっぱなしだったレポートを添削してフィードバックできるようになった｣｢報告や討論の時間が増え、内容が深まった｣｢ゼミへの誘導やキャリア教育についても時間が割けるようになった」など、改革の効果を実感する内容の意見が多く出された。

４．「基礎演習」改革を通じたFD活動の成果と課題

基礎演習を通じたFD活動の具体的な経緯は以上のとおりである。その成果を整理するならば、第１に、さまざまな教育観を持つ30余名の教員が導入教育の重要性や教育目標に関して一定の共通認識を持つに至ったこと、その結果として、20人クラス化、通年化を実現できたことが挙げられよう。２点目には、継続的なFD活動の成果として、お互いの授業内容に踏み込んで議論することを受け入れ、教育内容や評価基準を共通化すること

にある程度の合意を形成できた点が挙げられる。共通の出席ルールを設けたこと、具体的なシラバスの作成を義務付けて教員間で共有するようになったこと、共通教科書を指定することで授業内容に踏み込んでノウハウの共有化が図れたことは、大きな一歩であった。第３に授業評価アンケートを毎年実施し、分析結果を学部全体で共有する体制が構築できたことも大きな成果であるといえよう。このことにより、自分自身の授業の効果を定量的、相対的に把握・評価し、授業改善に役立てることが可能になった。

とはいえ、他大学の成功事例に比べれば、我々の取り組みは道半ばと言わざるを得ない。教育内容については未だにクラスによるバラツキが大きく、学生の満足度にみられる格差の問題も解消してはいない。こうした問題を改善するためには、私見では教員による自己評価や履修カルテの導入が次の課題となるのではないかと考えている。また、入学から卒業までのある時点で、折に触れて教育効果を確認することも必要だろう。付言するならば､授業アンケート実施のための予算確保の問題もある。これまでは学内外の補助金に申請することで、幸いにも毎年、学内予算を獲得できたが、継続的なFD活動の実施には予算の裏付けが必須である。

だが、学部のFD活動にとって一番大切なのは、全員参加でじっくり話し合い、合意形成するという経済学部の伝統を守ることではないだろうか。幸い、経済学部には授業はどうでもよいという教員は少ない。だからこそ、多様な教育観や信念がぶつかりあい、合意形成に時間がかかる点は否めないが、トップダウンによるFD活動の押しつけではなく、すべての教員が納得して改革を進めることが、結局はすべての教員の意欲的な取り組みにつながり、全体の底上げをもたらすだろう。

註

（１）　年度初めに自動的に履修登録され、登録の取り消しはできない。必修科目ではないので、基礎演習Ｂが修得できなくても卒業には影響しないが、当該時間帯にほかの科目を履修することはできず、GPAも下がる。検討の過程では基礎演習Ｂも必修にという意見もあったが、必修科目を増やすことで卒業延期者の増加を危惧する意見も根強かったことから、上記のような制約を課すことで履修を促す方法をとった。

（２）　構成的な調査票に基づくものではなく、それぞれの項目について自由に記述してもらう形式であった。

（３）　平成15年６月25日

（４）　平成18年１月11日

（５）　平成18年５月31日

（６）　正確にはクラスによってバラツキがあるが、平均で22人程度。

（７）　平成20年11月19日

（８）　平成20年11月19日

（９）　世界思想社編集部編2008.『大学生学びのハンドブック』世界思想社

資料１　基礎演習の成績評価について（平成19年３月２日教授会合意事項、19年度から実施）

（１）　出席要件

①　毎回出席を原則とし、単位認定の要件は全13回のうち９回以上の出席。８回以下の場合はＲとする。

②　15分以内の遅刻の場合には0.5回の出席と見なす。それ以上の遅刻は欠席扱いとする。

③　欠席が認められる事由は以下の場合のみで、事前又は事後に欠席届を提出させる。

ア　忌引き

イ　病気及び怪我

ウ　交通機関等の事情

※上記以外の事由による欠席は成績評価においてマイナス点をつける。また上記の事由であっても９回以上の出席がない場合はＲ評価とする。

備考）このほかに「クラスの集い」を実施し、全14回とした。

（２）　成績評価

上記の（１）の要件を満たした上で以下の項目につき評価し、成績評価の基準については事前に学生に公表する。

①　報告

②　発言またはコメント

③　レポート

※事前に学生に公表した成績評価の基準や授業運営の概要については後日経済学部教務委員会に提出する。

資料2　基礎演習に盛り込むべき内容（努力目標）（平成20年11月19日教授会合意事項、21年度から実施）

① 初年次研修・・・大学で学ぶ意識の醸成、國學院大學についての理解、履修の仕方や進路選択を含む大学生活のガイダンス（居場所の理解となじむこと）

② 学ぶための基本的スキルの学習・・・プレゼンテーション・レジュメ作成、ディスカッション、レポート作成、情報リテラシー、日本語表現

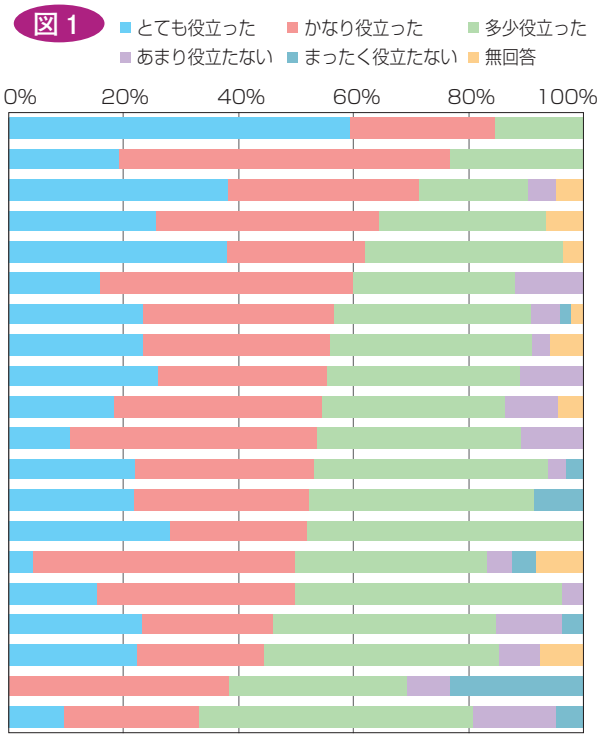
③ 専門教育への導入・問題意識の養成・・・文献購読（テキスト理解）、プレゼンテーション・レジュメ作成、ディスカッション

基礎演習は役に立ったか（平成18年度調査）

表１

	とても役立った	かなり役立った	多少役立った	あまり役立たない	まったく役立たない	無回答	
クラスA	59.6	25.0	15.6	0.0	0.0	0.0	84.6
クラスB	19.2	57.7	23.1	0.0	0.0	0.0	76.9
クラスC	38.1	33.3	19.0	4.8	0.0	4.8	71.4
クラスD	25.8	38.7	29.0	0.0	0.0	6.5	64.5
クラスE	37.9	24.1	34.5	0.0	0.0	3.4	62.0
クラスF	16.0	44.0	28.0	12.0	0.0	0.0	60.0
平　均	23.4	33.3	34.1	5.1	1.8	2.2	56.7
クラスG	23.5	32.4	35.3	2.9	0.0	5.9	55.9
クラスH	25.9	29.6	33.3	11.1	0.0	0.0	55.5
クラスI	18.2	36.4	31.8	9.1	0.0	4.5	54.6
クラスJ	10.7	42.9	35.7	10.7	0.0	0.0	53.6
クラスK	21.9	31.3	40.6	3.1	3.1	0.0	53.2
クラスL	21.7	30.4	39.1	0.0	8.7	0.0	52.1
クラスM	28.0	24.0	48.0	0.0	0.0	0.0	52.0
クラスN	4.2	45.8	33.3	4.2	4.2	8.3	50.0
クラスO	15.4	34.6	46.2	3.8	0.0	0.0	50.0
クラスP	23.1	23.1	38.5	11.5	3.8	0.0	46.2
クラスQ	22.2	22.2	40.7	7.4	0.0	7.4	44.4
クラスR	0.0	38.5	30.8	7.7	23.1	0.0	38.5
クラスS	9.5	23.8	47.6	14.3	4.8	0.0	33.3

図１

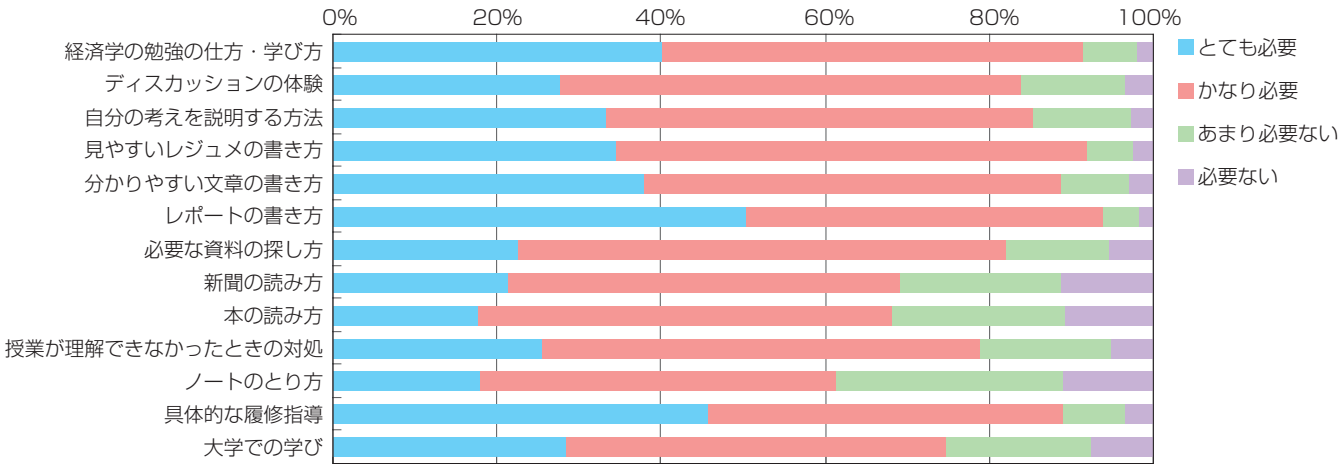


基礎演習で何を学びたいか？（平成18年度調査）

表２

	とても必要	かなり必要	あまり必要ない	必要ない	無回答
大学での学び	139	225	87	37	8
具体的な履修指導	221	209	36	17	9
ノートのとり方	87	211	135	53	6
授業が理解できなかったときの対処	123	258	77	25	9
本の読み方	86	244	102	52	8
新聞の読み方	101	224	93	53	21
必要な資料の探し方	110	287	61	26	8
レポートの書き方	245	211	22	8	6
分かりやすい文章の書き方	184	247	40	14	7
見やすいレジュメの書き方	167	278	27	12	8
自分の考えを説明する方法	162	252	58	13	7
ディスカッションの体験	135	272	61	17	7
経済学の勉強の仕方・学び方	196	250	32	9	5

図2



学部長からのコメント

経済学部長

中泉　真樹 教授

國學院大學経済学部が改革に次ぐ改革（平成八年度には新たに経済ネットワーキング学科を開設するなどの大がかりな学部改組、平成十七年度には経営学科の開設）を敢行してきたこのおよそ十五年間は、バブル崩壊後の「失われた十五年」と重なっていますが、これは偶然ではなく、経済学部はかなり早い時期から危機意識をもって学士教育のあり方を根底から見直す作業にとりくんできたといえるでしょう。

じつは、その過程では、大学教育のあり方をめぐって、壮絶な議論が教員の間で繰り返されてきました。学生たちの自主性を重視する立場からは、教員が基本的事柄を（選んで）手取り足取り教えることには、むしろ学生の学習・研究意欲を阻害する危険が潜んでいる、学生にとことん迷わせ苦闘させて「自ら考える力」を涵養させることこそが大学教育の本来の姿だ、ということになるし、一方では、学生の自主性を尊重するといっても、そうした自主的学びを可能とする土台や羅針盤があってこそ、何を学びたいのか（何が自分の興味関心なのか）を明確にできるし、本来の学び・研究の醍醐味を味わうこともできるのではないか、となります。

この論争に決着などありえないのですが、学生のニーズの変容、現代社会がもとめる大学の「教育力」像といった点に鑑み、「後者の考え方も、もはや無視はできなくなってきている」ことは、ほぼ間違いないでしょう。

とはいえ、理念だけ叫んでもそれは無意味です。学生が自由に自から問題を発見し、自分の頭で考えて（複数ありうる）答えを導くための準備としての「基礎力」の養成には、不断のFD活動が不可欠です。個々の教員の個性溢れる教育姿勢・教育手法をお互いに尊重しつつも、何を基礎知識とし、何を基本的な学びのスキルとするかについて徹底的に議論して「共有」、「標準化」を図るとともに、授業を「やりっぱなし」にすることなく、どこまで達成できたのか（できなかったのか）を集団的に検証し改善を図る努力こそが、これまで以上にもとめられるようになっているのです。これには相当の負担を要しますが、経済学部ではそうした試みに労力を惜しまなくなっています。もちろん、そうした教員の組織的なとりくみがどのような成果に結実するかは長い目で見ないとわかりませんし、早急に「結果」を求めるタイプの成果主義に陥ることは是が非でも避けるべきでしょう。

ただ、これだけはいえます。私たち経済学部の教員は、大学教育をめぐる環境変化に即応し、以前にもまして学生と向き合う姿勢を強めています。温かく見守っていただきたく思います。

シリーズ

大学授業最前線

―教員の努力！ 学生のまなざし！―

本コーナーでは、本学で素晴らしい授業を行っている先生方に、その努力と工夫について語っていただき、また受講学生からのコメントもあわせて紹介しています。第２回目の今回は、本学文学部准教授で、共通教育センター副センター長でもある針谷壮一先生に、担当授業「外国語学１（中）」を中心として、授業運営の工夫について紹介していただきます。また、３名の学生の方々から寄せられた、針谷先生の授業を受けての感想や気づきもあわせて紹介させていただきました。

教員の授業努力

「外国語学１（中）」

針谷　壮一

（文学部准教授）

――先生が担当されている「外国語学１（中）」はどのような科目ですか？

この科目は、中国語はどのような言語なのか、中国の地理や歴史と関連づけながら考えていく授業です。ひとくちに中国語と言っても、地域によって方言が存在し、使われる文字も異なります。私自身、大学生のころ毎年のように夏休みなどを利用して中国各地を旅行しました。行く先々で、教室で学んだ中国語とは異なる中国語に出会う。中国語を学び始めたばかりの私には、とても衝撃的な体験でした。この授業では、この私の中国語学習の原点を、学生にも体験してもらえたらと思っています。

――どのような学生が受講していますか？

この科目は文学部外国語文化学科の３～４年生向けの授業ですが、共通領域に開かれていますので、外国語文化学科以外の学生も受講することができます。受講者数は年によっても異なりますが、外国語文化学科の学生30名程度に加え、中国文学科や日本文学科の学生が５～10名程度、さらに法学部や経済学部の学生が数名ほど受講しています。

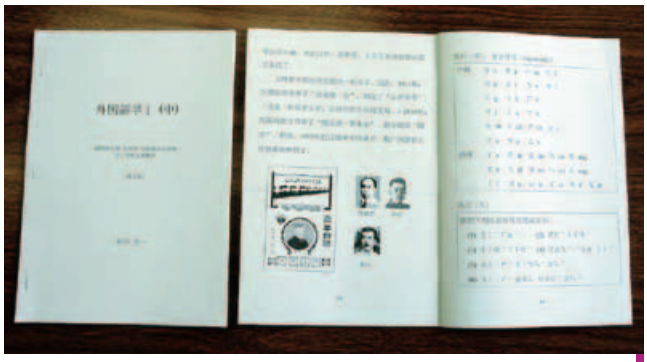
中国語をある程度学んだことのある学生なら、誰でも分かる内容になるよう心がけています。カリキュラム上は外国語文化学科の専門教育科目として配置されていますが、中国語学習そのものに教養と専門の区別はありません。１～２年次に学んだ中国語をさらに肉付けするという点は、どの学生にとっても同じです。本学では、以前は必修であった未修外国語（ドイツ語・フランス語・中国語）が、数年前から多くの学部・学科で選択科目になりました。このため、３～４年生向けの上級レベルの科目は、履修者数が減少し、維持しがたい状況になっています。外国語文化学科３～４年生向けの専門教育科目が、他学部・他学科の学生にとって事実上の教養総合未修外国語の上級クラスの役割を担っています。

――授業はどのように進められますか？

私が自ら作製したテキストを軸にして進めていきます。テキストはすべて平易な中国語で書かれています。学生一人一人にあてて、テキストの中国語を一文ずつ日本語に訳してもらいます。途中で地名が出てきたら、一つ一つ地図を参照して確認していきます。専門用語などは、図書館や資料室などを使って学生に調べさせます。また、テキストの内容に関連する映像資料も紹介します。中国の映画やテレビ番組などで共通語と方言とを使い分けている場面などを、教室で学生に随時見せていきます。現地の人々が生活の中で中国語をどのように使用しているのかを見せていくわけです。これは、外国語学習の上でも意義のあることですし、その言語の実態を知るという点でも意義のあることです。

――教室で気をつけていることはありますか？

大学での中国語教育では、１～２年生の段階で使用する教材には、漢字のほかにローマ字による発音表記が併記されています。しかし、この授業で使用する教材は漢字のみの中国語です。多くの学生にとって、漢字のみの中国語を読むのはこの授業が初めてです。このため、最



授業で使うテキスト

初の数回は、次回読む予定の部分を、私が前もって朗読して聞かせるようにしています。そうすれば、学生が家で予習をするとき、辞書を引くのが少しは楽になるからです。

外国語学習は、自力で辞書を引いて意味を解読できるようになることが目標です。学生が間違った訳をしても、私からすぐに直してあげたりはしません。その場で辞書を引かせ、学生と一緒に「なぜそういう意味になるのか」を考えるようにしています。教師は、その言語ができてしまうので、「学生がなぜ間違えるのか」を理解できないことがある。学生が間違えたとき、教師がすぐ正解を与えてしまったら、学生の間違えた原因を覆い隠してしまうことになる。上級レベルでは「なぜそうなるのか」を学生と一緒に考えることが、教師にも学生にも必要だと思っています。

受講学生からのコメント

①Aさん（文学部外国語文化学科・女性）

この授業を受講して、中国の言語・歴史・文化について学ぶことが出来ました。１・２年生の中国語の授業では共通語について学ぶのが中心でしたが、この授業では北京語・上海語・広東語・台湾語の方言などを中国の言語について細かく勉強することが出来ました。授業の中では、各方言を発したテープを流してくれました。私はそのテープを聞いた時、同じ中国語であっても方言によっては話す雰囲気やイントネーションが全く異なる事に驚きを感じました。１・２年生の時には、教科書にピンインや文法が記載されていた為、その部分を見ながら考えることが出来ました。しかし、テキストには漢字しか記載されていない為、ピンインを調べ、今まで習った文法事項を思い出しながら授業を受講していました。今まで勉強した中国語の知識がいかに大切であるかという事を実感しましたし、新しい漢字や文法を発音、理解するのには苦労しました。分からない時は辞書を使用しながら先生が一緒になり考えてくれた為、楽しく授業を受講する事が出来ました。この授業を通じて、言語だけではなく歴史・文化を勉強出来た事で中国に一層興味を持ちました。例えばテレビで中国人の方を見ると、この人はどこの方言を話しているのだろうかと思ったり、歴史から中国人にとって日本とはどのような存在なのかと考えたりするようになりました。中国について詳しく学んでいきたいと考える人には、この授業を受講するのが楽しみであるという印象を受けました。

②Bさん（文学部外国語文化学科・男性）

中国語とは、どのような言語なのだろう？

中国語を学ぶ際、このように思い学習に励む学生は多くはないと思います。

先生に教えられた語彙、文法、発音をただ唯唯諾諾とこなし、テストが近くなったらソコソコ勉強を始める。そんな学生が大半だと思います。実際私もそうでした。

針谷先生の「外国語学Ⅰ」を履修して、その考えは大きく変わりました。

授業の冒頭で童謡の「北風と太陽」を中国の地域ごとの方言で聞きます。普通話（標準語）の中国語は、これまでの２年間である程度は聞き取れるようになっているので大体の内容は掴めます。

しかし、天津や上海、ハルピン、台湾の閩南語（ビンナン）などの言葉で聞くと全く理解できないのです。プリントの文章を目で追っていくことさえもできません。

「同じ中国という国で使われている言語なのにこんなにも違うのか」

私はこれまでの２年間でいかに中国語の外側だけを見て学習してきたか、ということを今更ながらに痛感しました。

これまでに出会うことの無かった「新しい中国語」に

触れることができるので、毎回の授業を新鮮な気持ちで受けることができます。

また、針谷先生の映画や地図を用いた懇切丁寧な説明、教材は探求心をくすぐるものでした。

この授業で大切な点は、自分の中国語に対する探求心や興味をいかに掘り下げられるか、だと思います。地域ごとの方言や言語を地理的な側面と歴史的な側面から観察し、向き合うことで面白さを感じることもでき、またそれが難しさでもあります。

中国語を外側からだけではなく、内側からも見たい！「語学」という範疇に囚われずに国の歴史や地理を学びながら、本当の中国語の姿を見てみたい！

授業を通じて少しでもそう感じるようになれば、後のレポートは素晴らしい出来になるのではないでしょうか。

この文を読んで、多くの学生が中国語に興味を持ち、語学への視野を自分なりに広げることができたら幸いです。

③文学部中国文学科４年　鈴木志保（南開大学留学中）

僭越ながら受講生の１人として、筆を執らせて頂きたく存じます。

「外国語学Ⅰ」は、数多くある講義の中、受講して良かったと思える講義の１つです。針谷先生は、この講義を通じて、今まで単なるコミュニケーションツールとして看做してきた中国語という言語の深奥さと面白さを感じさせてくれました。私は現在上海に留学中なのですが、留学生活を享受する為の基本姿勢をも教えて頂いたように思います。

まず、この講義は、解り易くまとめられた中国語文献に沿って進行されていくので、今まで習った知識を確認しつつ、割合抵抗無く多彩な中国語の世界に入っていく事が出来たように思います。一口に「中国語」といっても、私たちが普段大学で第二外国語等として学ぶものは、標準語という中国語の一面的な部分にしか過ぎません。しかしながら、実際に現地に赴けば、否が応でも各地方の地理に根差した方言や、歴史と共に発展した文化の存在に触れる事になります。この講義では、そんな中国語のさまざまな顔を体系的に示してくれます。

中でも印象的だったのは、「北風と太陽」という１つのお話の録音を標準語・北京語・上海語・香港語・台北語等でそれぞれ聞いた回です。発音を始め、表音記号、単語や言い回し等に見られる方言ごとによる大きな差違は、最早「中国語」という１つの枠組みに括ることが憚られるような感を抱かずにはいられませんでした。

講義は地理的側面からの観察に止まらず、歴史的側面からの観察にも及びます。地域や国としての言語の歴史と時代背景との関連性を知ることにより、人の移動は言語や文化の移動と新たな形成を生み出すという事、言語は停滞する事を知らない「生き物」であるという事に改めて気付かされました。また、私の中国語に対する姿勢にもある大きな変化が生まれました。すなわち、ただ盲目的に「中国語と呼ばれるもの」を学ぼうとするのではなく、文化や古典・地理・歴史等を体系的に学ぶ事によって初めて「中国語」を学ぶと言えるのではないだろうか、という思考に至ったのです。この考え方は、事実、留学生活を支える大きな柱となっています。

私論ではありますが、どんなに先生が素晴らしい教授をして下さっても、講義「を」受けるだけでは勿体ありません。如何に講義「から」自分に近付け、発展させるかが肝要です。どれだけ自分に近付けて事象を捉える事ができるか。それは自身の収穫と成長を大きく左右すると確信しています。

留学生活も残り僅かとなりましたが、今後も「外国語学Ⅰ」で学んだ姿勢を活かしつつ、まだ知らない中国語の顔に出会える事を楽しみに精一杯精進していきたいと思います。

旧科挙試験場付近にて

浦東空港にて（万博キャラクターと）

教育開発推進機構彙報

（平成21年11月１日～平成22年５月31日）

会議

○運営委員会

［平成21年度］　第４回：２月５日　第５回：３月17日
［平成22年度］　第１回：４月21日

○國學院大學FD推進委員会

［平成21年度］　第３回：12月９日　第４回：１月20日

○教育開発センター委員会

［平成21年度］　第６回：11月11日　第７回：12月９日
第８回：１月20日　第９回：２月24日
第10回：３月17日
［平成22年度］　第１回：４月21日　第２回：５月19日

○共通教育センター委員会

［平成21年度］　第６回：11月11日　第７回：１月13日
第８回：２月24日　第９回：３月17日
［平成22年度］　第１回：４月21日　第２回：５月19日

○学修支援センター委員会

［平成21年度］　第６回：11月11日　第７回：12月９日
第８回：１月20日　第９回：２月17日
［平成22年度］　第１回：４月21日　第２回：５月19日

○全体連絡会

［平成22年度］　第１回：４月６日

行事

○講演会・シンポジウム

11月14日　國學院大學人間開発学会設立記念公開講演会・シンポジウム「人間開発学研究の胎動―大学の行方を見据えて―」（人間開発学会主催・本機構共催）
①公開講演会「これからの大学のあり方と課題」
講師：天野郁夫氏（東京大学名誉教授）
②公開シンポジウム「人間開発学の樹立に向けて―展望と課題―」
発題：田沼茂紀・柴崎和夫・安野功・一正孝・原英喜（いずれも國學院大學人間開発学部教授）
コメンテーター：奈須正裕氏（上智大学総合人間科学部教授）

12月２日　平成21年度後期FD講演会「学士課程教育の構築に向けて―３つのポリシーの実現方策とシラバス―」（國學院大學FD推進委員会・教育開発センター主催）
講師：沖裕貴氏（立命館大学教育開発推進機構教授）

○教育開発懇話会（教育開発センター主宰）

11月12日　第３回「経済学部におけるFD活動の現状と課題」
報告者：橋元秀一（経済学部教授）　田原裕子（経済学部教授）

○研修会・打ち合わせ会等

２月５日　SA（スチューデント・アシスタント）第Ⅰ期担当者ヒアリング会
３月５日　教養総合「神道科目」平成22年度担当者打ち合せ会（共通教育センター）
３月29日　京都大学高等教育研究開発推進センターFD担当若手教員に関するヒアリング調査へ対応

FD活動、教育支援

［平成21年度］
10月～３月　SA（スチューデント・アシスタント）制度トライアル実施（第Ⅰ期）
12月10日～１月21日　学生による授業評価アンケート実施（後期）
［平成22年度］
４月１日　新任教職員研修（第１回）
４月24日　SA（スチューデント・アシスタント）説明会
４月～７月　SA（スチューデント・アシスタント）制度トライアル実施（第Ⅱ期）

出張等

［平成21年度］
12月11日、12日　柴崎学修支援センター長・鈴木助教・松本教務課主任、富山大学の学修支援体制ヒアリング調査実施
１月７日、８日　中山助教、文部科学省・文教協会主催「大学教育改革プログラム合同フォーラム」に参加（晴海ビッグサイト）
１月29日　鈴木助教、第９回障害学生修学支援セミナーに参加（東京国際交流館）
３月９日　新井助教・中山助教・小濱助教・鈴木助教、IDE高等教育フォーラム（学術総合センター　一橋記念講堂）に参加
３月18日　中山助教、全国私立大学FD連携フォーラム主催ファカルティ・ディベロッパー養成講座「アクティブ・ラーニングの方法と実践」に参加（法政大学）

刊行物

［平成21年度］
11月４日　教育開発推進機構NEWSLETTER『教育開発ニュース！』第１号発行
３月10日　『國學院大學　教育開発推進機構紀要』第１号発行
３月　『平成20（2008）年度　授業評価アンケート分析報告書』発行

教育開発推進機構教職員紹介

教育開発推進機構は、４名の専任教員と３名の兼担教員、そして３名の事務職員を配置して、本学の教育力向上と教養教育に関する調査・研究と、それに基づく企画立案、全学及び各学部における人材育成の支援、学修支援センターにおける学生への相談業務などを行っています。

昨年度の発足以来、FDに関するイベントや研修会の開催、アンケート調査の実施、SA制度導入に先立ってのトライアル運用、『教育開発推進機構紀要』の刊行などを行いました。

２年目を迎えて、これらの試みを更に本格化・実質化するため、一層力を尽くしてまいります。

前列左より柴崎和夫学修支援センター長・赤井益久機構長・加藤季夫共通教育センター長。後列左より新井大祐助教・中條豊教務課主幹・川島富貴子教務課書記・中山郁准教授・内藤紗綾香教務課書記・鈴木崇義助教・小濱歩助教。

中條　豊（教学事務部教務課主幹）　新任職員

メッセージ　22年ぶりに職員としての原点である教学部署に戻り、この４月から学生とのふれあいの最前線におります。当時にくらべ、カリキュラムはじめ学修の環境は各段に変貌し、「浦島太郎」の感は否めませんが、初心に立ちかえり、「至誠」をモットーに業務に取り組みたいと思います。学生のみなさん、ぜひいらしてください。

内藤紗綾香（教学事務部教務課書記）　新任職員

メッセージ　再開発が完了し、新しく生まれ変わったこの國學院大學で、学修や授業に関する不安・悩みを解消し、素敵なキャンパスライフを楽しんでもらうためのお手伝いができればと思います。私自身、まだまだ学ばねばならないことはたくさんありますが、みなさんと向き合い、色々な話をしながら、「一緒に」一歩ずつ進んでいきたいと思っております。どうぞ宜しくお願いいたします。

喫啄同時（そったくどうじ）
― 編集後記 ―

無事第２号刊行の運びとなりました。今回は、①平成21年度後期のSA制度トライアル運用に参加した学生と機構教員との対談、②第３回FD懇話会の内容を中心としています。SAとの対談では、学生が実際の業務のなかで感じたこと、先生方からの反応、スムーズに業務を遂行するための工夫、制度の改善点など、多くのトピックが飛び出しました。今後に向けてヒントになる点も多く、幾つかの点は既に制度設計にもフィードバックされて現在の運用に活かされています。また、FD懇話会では、各学部における教育改善のあり方を考えるため、経済学部の取り組みを紹介していただきました。他学部の先生方から見ても大いに参考になるであろう、中身の濃い報告でした。更に「大学授業最前線」では、文学部の針谷壮一准教授の授業を紹介させていただきました。全体を通して〈学生の参加〉〈学部の取り組み〉〈現場での工夫〉と、FDを進めてゆく上での様々な視点について、改めて考えさせられる内容になったと思います。（小濱）

教育開発推進機構NEWSLETTER『教育開発ニュース！』第２号　平成22年6月00日発行
発行人 赤井益久　編集人 中山 郁・新井大祐・小濱 歩　発行所 國學院大學教育開発推進機構　〒150-8440　東京都渋谷区東4-10-28